



日本では毎年約100万人が死亡し、そのうち病院以外の場所で不慮の死を迎える人は年間約15万人にのぼっています。ところが、日本の場合、かなり疑わしい死体でも解剖にまわされないケースが大半で、2007年の司法解剖率はわずか3.8%（約5000体）にとどまっています。実はこの数字、世界的に見ても最低レベルで、異様な低さだといわれています。

本書にも見聞録が収録されていますが、私は07年、オーストリアで解剖の現場取材してきました。人口約160万人の首都・ウィーンでは、年間約18000体の変死体が発見さ

「日本人は生きている間は先進医療を受けられます。しかし、一旦心臓が止まると、江戸時代へタイムスリップしてしまうのです」

れ、犯罪死体もそうでないものも、最終的には全例、つまり100%解剖し、薬毒物検査なども入念に行な

った上で死因を特定していました。ウィーン医科大学の法医学教室をひ

つきりなしに出入りしている棺や、ずらりと並んだ200体分の死

体用冷蔵庫を見たときは、日本とのあまりの

違いに驚いたものです。

ちなみに、私の住む千

葉原の人口は600万

人ですが、年間の司法

解剖数は約2000体。

死体用の冷蔵庫は2つ

しかありません。

## 「焼かれる前に語れ」 司法解剖医が聞いた、哀しき「遺体の声」

日本の警察は「五官」を使って死体や現場を観察し、犯罪性が疑わ

れるものは解剖に、そうでない（と思われる）ものはそのまま遺族に引

渡しています。しかし、法医学の専

門家でない警察官が、「五官」だけで

死因を正確に判断することができる

のでしょうか。

答えはもちろん、「NO」です。実

際に、福岡のスナックママによる夫

殺人、佐賀の女性看護師による夫と

次男殺人……など、多数の保険金殺

人が検視のミスで見逃されてしま

た。また、記憶に新しいのは、07年

に、私のもとには「肉親の死因に納得できない」といった遺族の切実な

声が次々と寄せられています。

そこで、本書ではその原因を探る

べく、地下鉄サリン事件をはじめ数

多くの司法解剖を手がけてきた千葉

大学法医学教室の岩瀬博太郎教授と

ともに、崩壊寸前とも

いわれている日本の検視・司法解剖現場の

実情を告発。さらに、誤

認検視による殺人の見

逃し、放置される薬毒

物中毒、繰り返し返される

幼児虐待、立ち遅れる

バイオテロや感染症へ

の対応など、深刻な被害の実例を挙げながら、抜本的な制度改正への提

言をおこなっています。

「日本人は、生きている間は先進

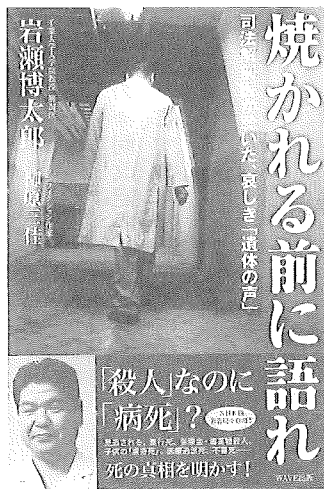
医療を受けられます。しかし、一旦

心臓が止まると、江戸時代へタイム

スリップしてしまうのです」

岩瀬教授のそんな言葉も、決して

オーバーではないのです。



岩瀬博太郎・柳原三佳著/2007年9月刊/  
247頁/定価1575円(税込)/WAVE出版